三宅 由夏

『エドゥアール・グリッサン――＜全 - 世界＞のヴィジョン』

（岩波現代全書、2016 年）

著　中村 隆之

本書は、『カリブ世界論――植民地主義に抗う複数の場所と歴史』（人文書院、2013 年）の著者であり、『フォークナー・ミシシッピ』（インスクリプト、2010 年）、『痕跡』（水声社、2016 年 [原題の直訳は『奴隷監督の小屋』]）といったエドゥアール・グリッサンによる評論や小説の翻訳者でもある中村隆之氏による、本格的なグリッサン論である。

エドゥアール・グリッサン（1928-2011）は、カリブ海のマルティニック島出身のフランス語圏を代表する詩人・小説家・思想家であり、コロンブスの「新大陸」到達から 500 年目の 1992 年にノーベル文学賞を受賞したセント・ルーシャ出身のデレク・ウォルコット（1930-）とは同世代、また同年にゴングール賞を受賞したマルティニック出身のパトリック・シャモワゾー（1953-）の一つ上の世代にあたる。このシャモワゾー世代のカリブ海作家たちによる文学宣言『クレオール礼賛』（1989 年）はグリッサンの仕事に負うところが大きく、また文化の生成過程を説明する際にグリッサンが意識的に用いた「クレオール化」という言葉は、異文化間の接触が様々な次元で起こっている昨今の状況を解明する概念として、カリブ海地域のみならず、その外部においても注目を集めている。

とはいえ、本書のプロローグにも述べられているように、グリッサンの文章は「難しい」。著者は、その難解さを簡略化して図式的に説明したり、作家の思索的な言語体系に浸ってうっとりしたりせずに、グリッサンの作品と実人生を丹念に辿りながら、私たちの多くにとって「難解」に映るグリッサンのヴィジョンが、なぜそのように書かれる必要があったのか、という問いへと何度も立ち戻りつつ、その都度さまざまな方向から別の問いを伴ってこたえてゆく。「彼の『黒い肌』と、彼の書くものとのあいだには何か関係があるのか。出身地であるマルティニックとはいったいどのような島なのか。彼の母語はフランス語なのだろうか。どのような作家に影響を受けたのか。そもそも、なぜ書くのか」といった、一見すると素朴な問いである。しかし本書が全体をとおして見事に示しているように、これらの問いはすべてグリッサン思想の根幹にある＜全 – 世界＞という壮大なヴィジョンに紐づいており、このヴィジョンの形成過程とともにグリッサンの文学的営みを辿り直すことで、抽象度の高い概念と具体的な問いの結びつきが次第に見えてくるばかりでなく、カリブ海という場所の歴史的経験やそこから生じてきた言語形態を想像的に遡行し、おのずと世界を知る方法を学ぶことへと繋がってゆく。

第一章「開かれた船の旅」では主に、ヴィシー政権下において極度の物資不足にあったマルティニックで、バナナの葉にタイプライターで打って作ったという新聞『フラン・ジュ』に掲載されたグリッサンの初期の詩から、長編詩『インド――一つの陸地ともう一つの陸地の詩』（1956 年）

までの詩作活動が検討される。そこには奴隷船による航海を、アメリカスの「プランテーションの民」に共通の物語として据える、グリッサンの一貫した立ち位置がすでに全面的に認められる。

第二章「＜一＞に抗する複数の土地」では、脱植民地化運動「ネグリチュード」が盛んだった1950年代におけるグリッサンの「政治」や「歴史物語を書くこと」に対する姿勢が、『レ・レットル・モデルヌ（新文芸）』誌における書評や『プレザンス・アフリケーヌ』誌へ寄稿した「黒人文学論」、そして最初の長編小説『レザルド川』（1958年）を通して立体的に示される。「文学作品はたしかに政治的『意味』を有するが、書くことを通じて政治を行うことは拒否しなければならない」(pp. 55-6) と考えるグリッサンが、『レザルド川』において新たな「語り」の方法や風景（空間）描写の濃密な文体を創造する必要があった所以を、作品細部の繊細な読解とともに明らかにしている。

第三章「歴史物語の森へ」では、『レザルド川』からその舞台や登場人物を引き継いでいる『第四世紀』（1964年）を中心に、「マルティニック・サーガ」とも呼びうるグリッサンの物語世界がさらに別の方向へ深化するさまを、その語りの大きな影響元であるフォークナーの手法との関係、また「逃亡奴隷」の理想化や過去を想起する方法の世代間のずれといった小説内の主題をとおして考察する。ここで鮮やかに浮かびあがってくるのは、マルティニックの歴史に対するグリッサンの文学的アプローチの固有性であり、その舞台装置としてのカリブ海の民衆による主体的な歴史形成を可能にする「森」の空間である。

第四章「消滅したアコマ、潜在するリゾーム」は、1965年にマルティニックに帰郷したグリッサンがフランス式の公教育に対抗するために新たに設立した教育施設IMEと、それにともなって発刊された『アコマ』誌の文章（のち大部分が『カリブ海序説』に所収）における問題意識を中心に展開される。フランス領カリブの「クレオール語」は民衆文化の基層を成しているが、同時にこれはプランテーション・システムの中で否定的な構造化によって形成された言語であるため、「叫び」にはなりえても「概念化」され持続する言語となることを断念している。こうした現状分析から新たにグリッサンが取り組もうとした「＜われわれ＞の物語」として『奴隷監督の小屋』（1981年）の特異な語りに文学的野心を読み取る。

最終章「カオスの海原へ」では、「悲観主義を超える強靭な肯定の言語表現」を獲得するようになる『マアゴニー』（1987年）以降のグリッサン作品の中にあらわれる＜混沌（カオス）＞の観念に焦点があてられる。カオスの詩学は、空間の遠近、時間の推移、潜在的なものと現実的なものを混ぜ合わせ、＜全 – 世界＞のヴィジョンへと合流してゆく。

グリッサンの詩的探求を辿る本書は、基本的に時系列に沿って展開されているにもかかわらず、そのような直線的感覚が薄い。作家を取り巻いていた現実と創作された作品内の現実の共振や、「過去を幻視する」作家の「預言」的な性質が、著者によって深いところで探り当てられているためか、循環している時間をくり返し別の場所、別のルートで経験したような、不思議な読後感が齎される。カリブ海の小さな島を起点に展開される＜全 - 世界＞というグリッサンのヴィジョンは、個々の感覚や歴史的経験と切り離された概念として「理解」するようなものから最も遠く、それゆえに謎めいた、「難しい」ものと映るのかもしれない。本書がそのヴィジョンに接近するための心強いガイドになるとともに、そのヴィジョンのひとつの実践のかたちでもあるということは確かであるように思われる。